

Title	Immunohistochemical expression of Ki 6 7 and p 5 3 by cells in odontogenic epithelial islands in the walls of dentigerous cysts and keratocystic odontogenic tumors
Author(s)	奥平, 紳一郎
Journal	歯科学報, 116(5): 424-425
URL	http://hdl.handle.net/10130/4146
Right	
Description	博士(歯学)・第2072号(乙第783号)・平成26年11月12日

氏名(本籍)	おく だいら しん いち ろう (愛知県) 奥 平 紳 一 郎
学位の種類	博士(歯学)
学位記番号	第 2072 号(乙第 783 号)
学位授与の日付	平成26年11月12日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	Immunohistochemical expression of Ki67 and p53 by cells in odontogenic epithelial islands in the walls of dentigerous cysts and keratocystic odontogenic tumors
掲載雑誌名	日本口腔検査学会雑誌 第 7 巻 1 号 10-15頁 2015年
論文審査委員	(主査) 井上 孝教授 (副査) 片倉 朗教授 山本 仁教授 松坂 賢一准教授

論文内容の要旨

1. 研究目的

顎骨内病変である含歯性嚢胞は發育性嚢胞として知られ、同じく角化嚢胞性歯原性腫瘍はかつて發育性嚢胞として分類されていたが後に腫瘍性病変として分類された病変である。この2つの疾患においてしばしば嚢胞壁に歯原性上皮島が観察される。本研究の目的は含歯性嚢胞および角化嚢胞性歯原性腫瘍の嚢胞壁内に存在する歯原性上皮島を構成する細胞の細胞増殖活性および癌抑制遺伝子である p53 の発現を検索することである。

2. 研究方法

研究材料として2011年4月から2013年3月までに東京歯科大学千葉病院口腔外科および水道橋病院口腔外科で摘出あるいは切除された含歯性嚢胞あるいは角化嚢胞性歯原性腫瘍と病理組織学的に診断されたものを用いた。全検体数に対する各病変の割合および顎骨内のエックス線透過性病変に対する割合を統計的に検索した。さらに、これらの病変のうち炎症性細胞診浸潤のない検体をそれぞれ20例抽出し、Ki67および p53 を用いた免疫組織化学的染色を行った。そして、1切片あたりの歯原性上皮島の数、歯原性上皮島1つあたりの細胞数、Ki67陽性細胞率および p53陽性細胞率を計測した。

3. 研究成績および結論

全3360検体中含歯性嚢胞と病理診断されたものは457例、13.6%であり、角化嚢胞性歯原性腫瘍は73例、2.2%であった。そして、顎骨内エックス線透過性病変中の含歯性嚢胞の割合は37.7%で角化嚢胞性歯原性腫瘍の割合は6.0%であった。そして、全含歯性嚢胞における歯原性上皮島が観察された症例は98例、21.4%で、全角化嚢胞性歯原性腫瘍における歯原性上皮島が観察された症例は26例、35.6%であった。歯原性上皮島1つあたりの構成細胞数は含歯性嚢胞が 29.03 ± 0.66 個、角化嚢胞性歯原性腫瘍が 47.84 ± 0.56 個であった。Ki67陽性細胞率は含歯性嚢胞が $2.92 \pm 0.01\%$ 、角化嚢胞性歯原性腫瘍が $6.57 \pm 0.03\%$ であった。p53陽性細胞率は含歯性嚢胞が $0.41 \pm 0.31\%$ 、角化嚢胞性歯原性腫瘍が $0.80 \pm 0.83\%$ であった。本研究の結果、歯原性上皮島が存在する症例ではその増殖による再発の可能性も考慮する必要があることが示唆された。

論文審査の要旨

顎骨内歯原性嚢胞性疾患における裏装上皮の免疫組織化学的検索は数多く研究されているが、嚢胞壁内に存在する歯原性上皮島に関する研究はほとんど見られない。本研究は腫瘍として分類されている角化嚢胞性歯原性腫瘍と発育性嚢胞である含歯性嚢胞の歯原性上皮島の細胞増殖能である Ki67 と癌抑制遺伝子である p53 について検索したものである。

本審査委員会は、審査委員から 1. 歯原性上皮島の病態的意義, 2. Ki67 の陽性率について, 3. p53 野生型と変異型, 等について口頭試問がなされた。1 について歯原性上皮島の一部が腫瘍性あるいは発育性に増殖して病変が成り立つ可能性がある, 2 について Ki67 の陽性率が高いほど腫瘍性の増殖である可能性が高い, 3 について p53 の免疫組織化学的染色において通常では野生型はほとんど発現せず発現している細胞はほとんどが変異型である, 等の回答を得た。また, 審査委員は論文内の文章表現の確認および単語の妥当性などの指摘がなされ, 修正するよう求めた。

本研究で得られた結果は, 今後の歯学の進歩, 発展に寄与するところ大であり, 学位授与に値するものと判定した。